



緑の架け橋

会報第 30 号

協賛会員登録呼掛版)

2017 年 09 月 30 日

日中緑化交流基金助成事業

IFCCプロジェクト代表：佐藤晴男

協賛団体：NPO法人アジアンロード

寧夏・固原市、内モンゴル・多倫県（2件）の3カ年事業を終えました

IFCCの「日中の緑の架け橋を」事業は、足掛け 15 年となりました。寧夏・固原市と内モンゴル 2 件（灤河源プロジェクト、蒙京津冀プロジェクト）の 3 カ年計画を終えましたが、継続を予定しています。

～ 息長く、大河の一滴を育む ～

寧夏・固原市事業実施地・三期全景 2017・5・11



蒙京津冀プロジェクト 基地本部で補植 2017・7・22

への植林派遣団を予定しています。

緑の架け橋へ

2002 年 11 月緑の架け橋推進センター設立、その後推進母体の改編を行いながら足掛け 15 年を経ました。

これは日中緑化交流基金の助成を得た事業主催・IFCC国際友好文化センターの呼び掛けによるものです。

2008 年 11 月、緑の架け橋推進センター解散。その後、「緑の架け橋」の活動は、事業主催の IFCC 国際友好文化センターの下で「緑の架け橋プロジェクト」として継続され、2014 年まで 9 つのプロジェクトを実施、終了。累積 205 人が参加。

2014 年度（11 月開始）から、NPO アジアンロードを推進協賛団体として内モンゴル 2 ケ所、IFCC 単独で寧夏回族自治区 1 ケ所を開始。

3 カ年計画が 2017 年で終了しましたが、2017 年度（2017 年秋～2018 年秋）助成金申請で継続することに致しました。

2017 年度事業として 2018 年前期に三事業地

本会報は会員以外にも送付しております。趣旨協賛いただける方はどなたでもご参加できます。活動へのご協力をお願い致します。

IFCC 国際友好文化センター

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 333 辻ビル 405

TEL.03-3268-4387 FAX.03-3268-6079

口座：中央労働金庫市ヶ谷支店（普）0858119 郵便：00130-9-425994

会報は事業主催（IFCC）の植林プロジェクト特集となります

木が大きく育つように、友好と交流に厚みと幅を持たせよう

実施日：2017 年 5 月 10 日～14 日

岩手 木幡英雄

5月10日(水)

羽田空港⇒北京経由⇒銀川市

早朝の羽田空港国際線ターミナルで、今回の事業に参加される IFCC の佐藤晴男副会長（団長）、IFCC の鎌田篤則理事長、明日香日本語学校の田中由規理事長と合流した。佐藤副会長とは 2 年前の同緑化派遣団で一緒にさせていただいて以来でしたが、変わらぬ元気なお姿にこちらもすっかり安心と元気をいただいた。そして、羽田空港から 4 時間ほどで到着した北京空港で我々を出迎えていただいたのは、こちらも前回と同じく中国国際青年交流センターの羊さんと I F C C 北京事務所の劉さん。これでもう今回の活動への楽しみだけという気持ちで、寧夏回族自治区へ向けての旅がスタートした。

午後 3 時過ぎに前回から倍くらいに拡大中の銀川空港に到着した我々は、地元寧夏青年連合会の出迎えを受け、本日のホテルとなる「銀川悦海賓館」へ移動した。そのホテルの概観の大きさにも驚いたが、そのロビーは 4 階建て建物が入るくらいの豪華さだった。

その日の夜は、寧夏回族自治区青年連合会 丁 副書記、同青年連合会 温 部長から盛大な歓迎を受けた。そこでいただいた丁氏の挨拶で、「人を育てるには 100 年かかる」という話があった。緑化すること木を育てることは重要だが、もっと大事なことは人を育てることで、この緑化事業を続けることは人を育てることに繋がっているという意義を持っていることを私たちに伝えていただいた。

5月11日(木)

固原市生態緑化モデル林第 3 期起工式で記念植樹



朝 8 時半に超豪華ホテルを出発し、急速に整備が進む高速道路に入り、まずは西方面の中寧県へ向かい、そこから固原市へ南下した。途中、高速道路が工事のため一般道に降りたが、素晴らしいドライ

ビングテクにおちおち寝ていらなかった。何とか約 5 時間かかりで固原市に到着した我々は、急いで昼食を済ませ、一昨年に開工式典を行った場所へと移動した。

式典会場では、固原市青年連合会 喜 書記長、馬副職長と地元大学生やボランティアらに出迎えていただき、式及び記念植樹が行われた。喜 書記長からは、人間にとって地球はひとつ、生態環境を改善し、



生態的文明を建設することは中日両国の共存的な夢である。私たちは、全力を尽くして美しい固原市を建設し、生態環境を守り、人間と自然との調和的発展を促すために努力すると挨拶された。佐藤副会長からは、中国の大きな大陸からすれば私たちの植林事業はわずかな点に過ぎない。だがこの寧夏自治区で行われている 5 カ所の植林事業は見事に線に結ぶことができている。15 年前の初期に植えられた場所は、木が育ち、林に森にという「面」になり、大きな街が建設されている。私たちは、この植林事業を単なる友好交流事業としてだけでなく、更に大きな視野に立ち友好と交流を深めていきたいと考えている。それは、木が大きく育つように、友好と交流に厚みと幅を持たせ、多くの中国人と日本人が仲良くなれるきっかけにしていきたいからだと言われた。

この挨拶の後、固原市の生態環境の改善と、中日友好交流について心をひとつに、用意された雲杉の苗をみんなで植樹した。

式典後、我々は同地域での第 1 期、第 2 期の事業地の生育状況視察を行った。式典場所の土壌環境は決して良くはない場所であったが、その場所も乾燥し固化した黄土が激しく土壌浸食を受けた姿はまるでグランドキャニオンを思わせるほどであった。

聞くところによると、ここ 1 年雨は降っていないとのことであった。そんな環境においても、植林した

この日の宿泊は、固原市内でオープンしたばかりのこれまた高級ホテルに宿泊した。

須弥山石窟見学⇒中寧県生態緑化モデル林視察

この日は、まず、シルクロードでもある須弥山石窟群を見学した。今から約1,400~1,500年前に山岳地帯の中腹に造られた石窟群には、現在確認されている石仏の数として約350体。大きいもので高さが約20メートルになるものも残っている。この博物学的に大変貴重な石窟・石仏ではあるが、1966年からの文化大革命で消滅する危機があった。しかし、1920年ごろに起きた地震により山肌が崩れ、石窟群が隠



された形になり、人的破壊を免れることになったという。今回、訪れた相国寺という修復された石窟寺院には、約7メートルになる過去仏としての釈迦仏、現在仏としての阿弥陀仏、未来仏としての弥勒仏、いわゆる三世仏が納められていた。その姿を見て、未来の危機を予見した仏が地震を起こしたのではないかと思ったのと、現在の我々の植林という行為が未来の危機を救うことに繋がればと感じた。

昼食を地元の食堂で済ませ、2010年に実施された中寧県生態緑化モデル林を視察した。この場所は2年前も訪れているが、生育状況としては変化が見られず、むしろ悪く感じた。自然環境の厳しさもあると思うが、隣接するクコの畑が青々としていることと、周辺の道路や高速鉄道建設の影響を受けていることを耳にした。

この現状を踏まえて、佐藤副会長から寧夏青年連合会等に対し、モデル林事業はその地域の緑化活動をけん引していく重要な位置づけであり、より計画的な保育作業と管理が必要であるため、この状況を改善できるよう力を尽くしてほしいと強い意見を述べられた。

その後、経済林として生産量を伸ばしたクコを原料とした枸杞酒の酒造工場を見学した。最新の技術と設備を導入し、徹底した製品管理、衛生管理の下で枸杞酒が製造されており、寧夏の経済基盤として重要な位置づけになっていることを目の当たりにした。

この日、中寧県で宿泊したホテルは、前日も利用しており、今回の旅の中で一番、地元の生活感を感じ取れた。

銀川⇒北京

この日は、中寧県から銀川市方面に北上し、賀蘭山脈の麓の砂漠地帯にある西夏王陵を見学した。

西夏は、タングートの首長李元昊によって1038年に建国され、モンゴル帝国のチンギス・カンによって滅ぼされる1227年までの200年余り続いた王朝である。その西夏の墓陵が西夏王陵として現在の鶴

広島 金子哲夫

私が、植林緑化派遣団として中国を訪問するのは、4度目になりますが、2012年以来の5年ぶりです。そして今回初めて、「内モンゴル多倫県」での植林活動に参加しました。



中国国際青年交流中心
の洪桂梅 副主任と再会
(2017・7・24)

2002年にこの事業を推進する「緑の架け橋推進センター」の立ち上げに若干の協力をして以来、率直に言って「よく続いたものだ」という感慨を持っての今回の参加で

した。

同じ緑化事業でも、これまで参加した寧夏自治区と比べれば、「内モンゴル多倫県」条件は、格段に良い環境だと感じましたが、ただ共通して感じとることができるのは、中国の人たちの「緑化」に対する並々ならぬ力の入れようです。私たちが、この活動に協力し始めてからでも、すでに15年が経過していますが、いまだ道半ばというのが実感です。

もちろん、私たちの活動は、中国の緑化活動の小さなちいさな点に過ぎないことは、今回の交流を通じて、改めて認識しました。しかし、そんな小さな活動であっても、今の日中関係の中では、貴重なものだと実感するとともに、まさに「架け橋」となれるように、この活動が継続することを祈るとともに、微力ですが、引き続きかわってゆきたいと思います。

光地となっている。この王陵の形が大変特徴的で、今では巨大な蟻塚のように見えるが、当時はその塚を囲むように絢爛な木造建築物で覆われていたという。その大きさを考えれば、建築物としての高度な技術、それを支えた木材量と財力を推測でき、いかに大きな権力を持っていたのかが分かるものだった。そして、もう一つ、西夏の特徴として、梵字を参考にした独自の漢字を発展させていたこともある。これにより、高度な文明を築き、王朝の繁栄に寄与していたと思われるが、それが、武器で勝るチンギス・カンに狙われる要因だったのかもしれない。

貴重な歴史遺跡を見学した我々は、銀川市に戻り、寧夏青年連合会との昼食を終え、最後に、銀川市のシンボルである鳳凰のモニュメントを確認し、寧夏回族自治区を後にした。

ちなみに、この鳳凰のモニュメントについては、明日香日本語学校の校章デザインの原案となっている。今を去ること20数年前、今回、参加している田中由視さんがこの銀川市を訪れており、今回の旅はその時に見た鳳凰との再会という意味でもあった。

その日の夕方、北京に入り、中国国際青年交流センターを表敬訪問し、同センター 洪 桂梅 副主任らと会食し、同センターに宿泊した。

5月14日（日）

北京市⇒北京空港⇒羽田空港

この日は、帰国する日であったが、少しの時間があり、前回できなかった北京市内の散策をすることができた。やはり、銀川市や固原市とは違い、大都市としての雰囲気があり、近代都市としての大きさを感じた。初めての北京市内散策で気が付かなかったが、その日の北京の空はとても澄み切っていた。どうやら、その日は北京で開催された国際会議、一帯一路フォーラムが関係しているとIFCC北京事務所の劉さんは言っていた。真相は分からないが。私たちは無事に全日程を終了することができた。今回の旅でも、地元青年連合会の手厚い歓迎、そして緑化プロジェクトにかける強い想いを感じた。佐藤副会長が述べられたとおり、点が線に、線が面になっている。そしてまた、人への教育に繋がっていることを感じる事ができた。

最後に、このプロジェクトが成功することを心から願い、今回の機会を与えていただいたIFCCの鎌田さん、現地を同行していただいた羊さん、劉さん、そして佐藤副会長に心から感謝を申し上げ活動報告としたい。

「2017 年植林と草原の風にふれる旅」に参加して

植林と遊牧の民を考える

2017 年 7 月 20 日～25 日

北海道 千葉 忠司

2017 IFCC内モンゴル植林と草原の風にふれる旅、の案内を今回共に参加しました杉村さんから紹介を受けまして、中国の砂漠化が問題視されている現状に於いて、日中友好の架け橋として植林されていることに強く関心を持ち、林業労働者の端くれとして興味を抱き参加しました。



先ず以て、6日間の旅を楽しく有意義に引率して戴きました宮秋団長他同行の皆様へ感謝とお礼を申し上げます。私事の旅行とは国内を車で登山をしながら巡り歩くのが主流でありまして、空港を利用することは年に1～2回程度のことから、パスポートを持っての海外旅行は初めてのこともあり困惑ばかりの旅でしたが、言葉や食べ物等にも何らの障害もない旅を終えることができました。

内モンゴル州・多倫県内の植林状況や北京からの移動時に見る国土の風景は、私が予想していた状況よりは遥かに植林が進んでいることに感動しました。さすが中国の進めている政策の一環ではないかと思いました。未知の大陸を国土保全を基本として進められていることだと思います。

多倫県々長はじめ多くの関係者皆様の歓迎には感謝しかありませんが、植林・保育に対する情熱はあまり感じられませんでした。（私の偏見な見方ですが）行政の流れで進んでいることですから、申し上げられませんが、友好事業であることも踏まえた状況になっているのかという事も、考えなければならないのではと思います。

もう一つ感じたことは、国土保全のための緑化事業として位置付けるのか、農業と林業を共存させるための事業かということを確認しなければならぬと思います。植林された苗木が羊によって食害されていることはあってはならないことでありますし、植林された苗木が成長して行くことによって下層の草原がなくなってしまうことであります。

農地を豊かにするためには、周辺に広葉樹を植林し、防風林としての役割と農地改良にも繋がりますし、農地外は林業としての生産目標を持つ植林を行うことでしょう。その一例は、蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクトの一期・二期事業地保育事業ではないでしょうか。

また、グールで感じたことは、遊牧地の砂漠化をどう対処するのかということです。広葉樹が枯渇して砂漠化が進んでいることです。一見、ゴルフ場の様に見える草原地帯が遊牧牛等によって草の根まで食べられていくことによる砂漠化だと思います。

そして、この地域の人達は遊牧民としての生活を望んでおりました。

「2017年植林と草原の風にふれる旅」

内モンゴル・多倫県で2件のプロジェクトを実施

特定非営利活動法人アジアンロード
副理事長 木原 勇

2017年7月20日(木)～25日(火)の6日間、中国・内蒙古自治区シリントグ盟多倫県にて「中国青年瀾河源生態緑化モデル林事業」「蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクト」に7名が参加。今回は、樹木医・林業関係者が帯同し大変心強い植林ツアーとなった。

植林と友好の旅として今回で通算21回目であり、IFCC国際友好文化センターとしては「IFCC緑の架け橋プロジェクト」、アジアンロード企画では「モンゴルの草原の風にふかれながら」をそれぞれのテーマとして位置づけた。

7月20日午前9時10分、東京国際空港を離陸。飛行機は定時に北京国際空港に着陸。

入国審査を過ぎ、ゲートには、劉憲良 IFCC北京事務局長と中国国際青少年交流中心の馬さんが出迎えてくれた。

劉さんが「北京暑い?でも、東京も暑い!」と第一声。ちょうど昼食時間と重なり、北京空港はたくさんの方がいてとてもお店で食べられないと判断し、ハンバーガーを買って、バス移動をしながら食べることに。

我々の移動のために中型バスを手配していただき出発。中国の道路事情は、一年経つと変化しており、以前は、まだ道路整備のされていない悪路や道幅の狭い道を長い時間走っていたが、さすが高速道路が整備されていた。北京国際空港を出てから、多倫県に到着したのは、午後7時頃。まだ、陽が高いので、明るいうちに移動ができた。

21日9時30分から11時30分は「3カ年プロジェクト総括会議」に参加。

最初に王佛萌さんから、歓迎のあいさつがあり、続けて、燕尼林業局主任より中日青年瀾河源生態緑化モデル林事業、蒙京津冀青少年生態緑化モデル林の話がうかがった。多倫県で、すでに植林を行っている場所とプロジェクトと重ね、最初の頃は樟子松を植林していると報告があった。



成育状況の調査／蒙京津冀事業地

報告会終了後、現地視察。ここでは、20本の樟子松を記念植樹。苗木を植えるために、等間隔に穴を掘り、苗木を運び下し、土で埋め、水



3カ年の総括会議を行う(2017/7/21)

をバケツ一杯かける作業を行った。砂漠地区ではなく、草原地区ではあったが、元々砂漠だったところを草原化し、そこに植えたのであった。

張連根林業局長から「植林が始まってから、生態系に変化がおこってきている。植える前には、まず、草を植え、根を生やす。ただ、砂地に穴を掘り植えても、育たない」と説明があった。第1期事業地保育事業視察でも、張連根林業局長から「樟子松を植林している。2～3年はあまり成長しないが、4年過ぎると、成長する姿がよくわかります」とのこと。

今回参加した、林業経験者や樹木医が丁寧に観察していく中で「しっかり植えないと、冬に野ウサギに葉を食べられた形跡がある」「枯れている樟子松は植え替えることが大切」「できれば、苗畑も視察したい」との意見が出されていた。

翌日は、青年瀾河源生態緑化モデル林事業の保育状況視察を行った。ここでは、実際に管理している現地夫婦の説明を受けた。4年前からここで作業を行っており、樟子松だけではなく、果実の育つ木を植えており、それを収入の一部に当てているとのこと。この一つ一つ小さな作業が積み重なり、活着することで、砂漠化が食い止められるのであった。

日程の最終日、北京市内にある中国国際青年交流センターにて、王希宏部長・羊強振科長と面談。改めて、訪問の意義と現地視察を終えての意見交換を行った。

王部長は「全国30か所でこのような取り組みがあります。特に多倫県は、最も北京に近い。すでに多倫では、砂漠化対策を行っているが、このプロジェクトを行うことで、重層化されている。今後も続け

(次ページ右上へ)



第三期瀾河源の植栽跡

植林事業への参加と草原の民との出会い

NPO法人アジアンロード理事長 宮秋道男

私たちNPO法人アジアンロードは、3年前からIFC主催の「砂漠防止・植林活動」の一端に微力ながら協力してきたが、今回は、なんというか、私たちアジアンロードが協力する「味」といいいいのか、その意味合いが少し出せたかなと感じている。砂漠防止・植林はたいへん意味のある活動で、なんとかしっかりと成果をあげないといけないし、またその成果が着実にあがりつつあると実感する旅ではあったが、他方で、現地で何が起こっているのか、私たちは何を考えないといけないかの、材料を提供できたとも考えている。

植林を担っている現地の担当者や行政の方からの紹介、現地



視察などを行いつつ、すでになじみになった方との再会は素直にうれしいものだ(すすめられる酒にはつらいものがあるが)。また、昨年、あるいは一昨年、植えた苗がしっかりと活着している様を見るのも、ことのほか感動ものだ。暑い時もある、寒い時もある、何よりも雨が降らない中でよく根づいてくれたものだ、などの

感傷にひたりながら……。

私たちが関わっているのは、内蒙古の多倫県での植林事業だけだが、こちらの事業は、朱鎔基首相がかつて彼の地を訪れ「100万畝のグリーンベルト建設を」と呼びかけ、拍車がかかったようで(東京ドーム1万5千カ所分ほどの面積)、砂漠防止・緑化計画は着実に進められている。それは単なる環境政策の一環ではなく、非常に大規模に進められ、構造化されて、産業政策、農業政策や街づくり政策の一環となっているようだ。苗をつくる、苗を育てる、苗を管理する、そんな人や企業、団体が生まれている。

今回のオプションツアーとして、ファームステイをいれた。私どもの古くからの友人の紹介で、一泊することができた。草原の民・モンゴル人は元来、寡黙な人たちだ。薄暗いゲルの中でこちらが話しかけるとずっと口を閉ざしている彼ら彼女ら。その雰囲気は日本の地方の農家の方々と共通するものだ。そんな印象を私自身、各地のモンゴル人との付き合いを、10年以上、続ける中で得た印象ではあるが、今回、私たちがお会いしたモンゴル人家族も同様で、中国の国策である植林政策と生態移民政策のもとにありながらも、健気に暮らす方たちだった。来年もぜひお会いしたいものだ。

ちなみに、アジアンロードは交流団体だ。国内外での交流を続けて、20年近く。料理教室やお出かけイベント等の交流をしながら、支援的な側面のアプローチもしてきた。モンゴルの子どもたちへの奨学金贈呈や国内の留学生への居住確保・宿舍の運営など。草原の民・モンゴル人の暮らしに学びながらのファームステイ(スタディツアー)は私たちの活動の代表的な一つである。

なくては」と、強調。

最後に、王部長よりサプライズがあり7月誕生日を迎えた参加者に、誕生ケーキが用意され、微笑ましいひと時を過ごした。

プロジェクトも3年目。ここで一区切りではある。今後の事業の継続について後ろ髪を引かれながら帰路についた。

初めての体験 また成長の後を見たい

木原 悠

今回のツアーの1番の目的であった、植林ですが、私自身、植林を実際に体験するのは、初めてでした。植林という、イメージするものは、土に穴を掘ってそこに木の苗を植える、というものでした。

しかし、植林といっても、ただ単に掘って植えるだけではないということを今回のツアーで学ばせて頂きました。土を掘る位置、土の掘る加減、土を掘る深さ、木の苗の置き方、その上に土をかけるかけ方、水が苗のところに貯まる土の盛り方、周りの草を抜いて水分として使うこと、など、様々なことが学べました。

自分で植林を体験するだけではなく、今回のツアーには植林のプロも一緒に作業を行っていたというのは、大きかったと思います。

やはり、自分で試行錯誤してやるのと、プロの方に教えて頂いてやるのとでは、全く違いました。また、どんな植え方をしてはダメなのか、すでに植えてある苗でどれが枯れてしまっているのか、なぜ枯れてしまったのか、などということも学べました。

現地で集ったボランティアの方々が植林をした所に行って、視察をするというのも初めての経験でした。他の人が植え、それを実際に見て、何がダメだったのか、そして改善できる箇所は何なのか、という話し合いを間近で聞けできたのも、良い経験になりました。

何年後かに、自分が植林をした所に行き、しっかりと木が成長しているのかを見たいと思いました。

また、別のところで機会がありましたら、是非また植林をしたいと思いました。



草原の風にふれて／ホームステイで

【日中青年瀾河源生態緑化モデル林事業】

下草（植生）が回復しており成功

2017年7月22日実施

北海道 杉村政彦

7月22日午前中は、日中青年瀾河源生態緑化モデル林事業地に於いて補植作業、一期・二期事業地の植林後の保育・生育状況を視察した。

張連根林業局長から「樟子松が現地に適している。植林5年目で人間の身長を超える程度となる」と説明があった。

現地は私たちのすね程度まで下草（雑草）は回復・成長していたが、スコップで掘ってみると前日同様そこは砂であった。日本国内で催される植樹祭での一般的な光景の腐葉土・植壤土などを含んだ黒土とは全く



保育状況視察し補植する



異質なものに中国大陆の広大さを痛感させられた。

砂漠化し乾燥した大地（土壌）に植物を植えるポイントは、樹種（苗木）の選択と植え付ける技術であろう。砂塵舞う砂漠に、いきなり苗木を植えるのは

早計すぎる。下草などの植物を繁茂させ砂を固定させるのが第1段階。

その意味で現地は、下草（植生）が回復しており成功していた。スコップで根を掘り返したところ、横方向に伸びていた。根が大地の砂をつかみ固定されていることが良く判った。

樟子松の樹種特性は判らないが、乾燥に強く厳しい自然条件に適応しているものであることは推察できた。

植え付ける技術では、現地に応じた工夫が見られた。苗木を植える列にあらかじめ深さ30cm程度の溝を掘り、そこに苗木を植えていた。つまり一段低いところに苗木を植え雨水を集水させる意図が理解できた。ちなみに降水量が多い日本ではそんなことはしない。根腐れを起こすので、逆に根際に土を盛る。

午後は悪路の作業道をしばらく走行し植林を営む

1～2 期事業地で



農家の山を訪問した。牛や羊の放牧の結果、砂漠化した土地に入植したのが4年前とのこと。土地は国家が所有するが、50年間の利用権契約を結んでおり、補助金制度と併せ生産物（苗木）の売買収入は農家のものとなるとのこと。

従って、農家の経営努力が垣間見られた。午前中は樟子松（針葉樹）一辺倒であったが、様々な広葉樹が植えられていた。乾燥に耐えるヤナギや木の実を収穫できるアンズなどがあった。また、大きな面積で苗木20cm程度の雲杉が植えられていた。

（名前に「杉」が付くためスギ・ヒノキと混同されるが、実はマツ科。日本のマツ類と比較して、硬くなく、ヤニもほとんどないため加工性が良いのが特徴。我が国にも輸入され、細かな木目と柔らかみのある色が好まれ、羽目板・天井板・フローリングなどの直接目にする内装材として活用されている。）

この雲杉を5～6年かけて苗木長70cm程度にまで生長させて民間の苗木業者に売り払うとのこと。つまり小さな苗木を大きく育てて出荷する流通作物として育成させている。

農家いわく「雲杉は、樟子松の倍の値段になる」これには正直驚いた。日本の林業家は傾斜地の我が山に苗木を植えたら伐採できるようになるまで30～50年間以上かけて手入れをし生長を期待するが、ここでは短期の流通作物として苗木を位置づけている。山（土地）は、あくまでも借地であり農家個人の私有地ではないことを理解しないとイケない。

【蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクト】

現地技術者の試行錯誤と苦労

2017年7月21日実施

岩手 菊地智久

今回の旅は私にとって初の中国でしたが、ベテランの皆さんと一緒に旅で本当に心強かったです。また通訳の劉さんが同行してくれたこともあり一人旅では決して見聞きできな



植えられた樟子松の幼木



いような貴重な体験をすることが出来ました。

入国して2日目。プロジェクトの植林現場を視察する前に、午前中はホテル内の会議室にて事業全体の報告会がありました。中青連の王さんや燕さんからスライドをもとに説明を受けました。第3期が終わり、9年が経過した本プロジェクト（※現地での事業開始から。日中緑化交流金助成による事業としては3年目）。当初は飛砂の防止や自然災害の防止を目的とした砂漠緑化そのものが主たる目的でしたが、近年は農業振興や地域経済の活性化、青少年教育を目的とした保養観光地の建設というようにその目的も多様化してきているようです。それに伴い、生産する苗木も多様な広葉樹から障子松や雲杉に主力がおかれていました。これは苗木単価が高いため、生産する農家の意欲向上や安定的雇用の確保、そして成長後の木材資源としての価値といった経済的側面が考慮されているとのことでした。

また緑化事業の実施主体は青年連合会、多倫県そして林業局の3者からなり、緑化に関わる技術指導は現地林業局の技術者が行っているとのこと。ちなみに今回同行してくれた結達根さん（36歳）は2008年7月から技術者として担当されているようです。

午後はいよいよ現地視察。青少年交流を目的とした基地内で、障子松を植林しました。面白く感じたのは、植林した苗木の周りに土手を作り、後から灌水した時に効率よく水が根に向かって浸透するように工夫してあることでした。まるでもんじゃ焼きの土手のようです。そしてスコップの形状のユニーク

な事。日本のスコップが「梃（てこ）」なら、中国のスコップは「槍」です。足をかける所が無く、柄の先の持ち手が輪ではなくそのままの棒の状態でした。地面に突き刺してそのまま引き抜く道具の作りです。そうとは知らず、私は梃（てこ）のように使って柄を折ってしまいました。また現地を視察して感じたのは、緑化が随分と成功していることでした。草本類も何も無い荒野をイメージしていたのですが、現地では色々な草花が咲き、チョウやバッタが飛びまわる賑やかさ。しかしながら土壌層は貧弱で、有機物を含む表土は全く無く、歩くと靴が埋まるくらいの砂質土が大地を覆っていました。むしろこのような条件下で、よく植栽木が育っているなど感心しました。

また場所を変えた別の視察地では、強風による倒れを考慮して深めに植栽した結果、根の酸素不足で枯死したと推定できるものもありました。一方で、畝の溝に植える列状植栽の活着率が非常に高い実施例もあり、現地技術者の試行錯誤の苦勞が想像されました。枯死木への補植が徹底されていることもありますが、総じて緑化は順調に進んでおり、午前のプロジェクト説明であがった活着率80%以上の高さも頷けました。



2017 年度（23 回）派遣団参加者

佐藤 晴男	固原市	IFCC プロジェクト代表
木幡 英雄	固原市	岩手
宮秋道男	多倫県	NPO 亞洲道路
木原 勇	多倫県	NPO 亞洲道路
木原 悠	多倫県	NPO 亞洲道路
鈴木 夏	多倫県	NPO 亞洲道路
菊地 智久	多倫県	岩手
千葉 忠司	多倫県	北海道
杉村 政彦	多倫県	北海道

金子 哲夫	多倫県	IFCC
鎌田 篤則	固原市・多倫県	IFCC
劉 憲良	固原市・多倫県	IFCC 北京事務所

